

創立十周年記念号によせて

—生涯有悔—

井上金次郎

在市の歴史を愛好する人達が舞鶴西図書館に集まり、「舞鶴地方史研究会」を発足させ、機関紙を発行しようと話し合ったのは、去る昭和三十九年の十一月五日でありました。

そして翌春孔版で創刊号を出してからはや十年にもなります。

その間、私達の怠慢から特輯号も企画することをせず、通巻十八号しか発行することができなかつたことは、市史編さんの途上とはいへ会員諸兄に申し訳ないことだと思つています。

宮津の人・関清謙は、明治四十一年の春から、ただ一人で「丹後考」を編さんし、時代に順じた月刊誌を刊行して当時の郷土史家を啓発したといひます。

これは、この地方での郷土史研究の「はしり」といえるものでしょう。

戦前では広い意味での「地方史研究誌」としてもっとも永続したのは、沢村秀夫氏が編集した「郷土と美術」誌と思われまふ。

当時これを中心にして永浜宇平氏をはじめ岩崎英精氏、井上正一氏、それに舞鶴の人達も参加して「多爾波郷土史壇会」が結成され、はじめて丹後、丹波、但馬の研究者が横に広く連絡しあえる様になりました。

この月刊誌は、昭和十四年四月号を創刊号として五年目に当る十八年十月まで続刊しましたが、戦局倉皇の折柄、用紙の配給統制によって休刊の止むなきに至つて中絶しました。通巻四十八号でしたが、これに寄稿された方

々の多くは既に亡くなられ、健在で活躍されているのは五指に足りません。

先学、永浜宇平氏が昭和十六年六月永眠されて、その追悼会が文珠の智恩寺で行われた時の記念写真にのこる思い出は、今でも痛いほど胸を打つものがあります。

この思い出は、あながち私一人ではないらしく、昨年届いた岩崎先生のお便りにも「文珠堂での写真に、ならんだ顔をいま一々点検しますと、そのほとんどがあたり行きの方ばかりで、残りは寥寥。先日大田典礼氏と昔話に花を咲かせたことでした」とありました。

以後三十五年余、生活に追われる毎日ではあつても、無為に過ぎた歳月に悔恨の情新たなものがある此の頃です。

過日も画聖・渡辺華山が割腹直前、蘆生の故事にちなんで描いたという「黄梁一炊図」を見て人の一生のはかなさに戒を与え、これを遺言とした感懐に深い共感を覚えたのは私が老境に入ったからでしょうか。

由良川より採取した古代文化

遺物について

(三) 和江地先の地形資料と採取遺物について

杉本嘉美

一、まえがき

由良川河口に於て河底より、先史遺物の発見されたのは昭和三十六年が初例であつたが、その後これ等の遺物の河底散布の範囲は、河口より凡そ十六軒の各地点に分布していることが判り、最近では約二十軒迄の大江町高川原遺跡付近が上限として確認されている。

一方、昭和四十六年九月、舞鶴市桑銅下縄文遺跡が発見され、次いで昭和四十七年六月、大江町高川原（六世紀末～七世紀）遺跡が発見されるに及んで、従来の所説であつた河口より上流迄約二十二軒の範囲は僅かに一万分の一と云う川の落差をあげ、かつて西ヨーロッパの湖沼地帯に見られた杭上住居の形態で

二、由良川河口和江地先の地形と

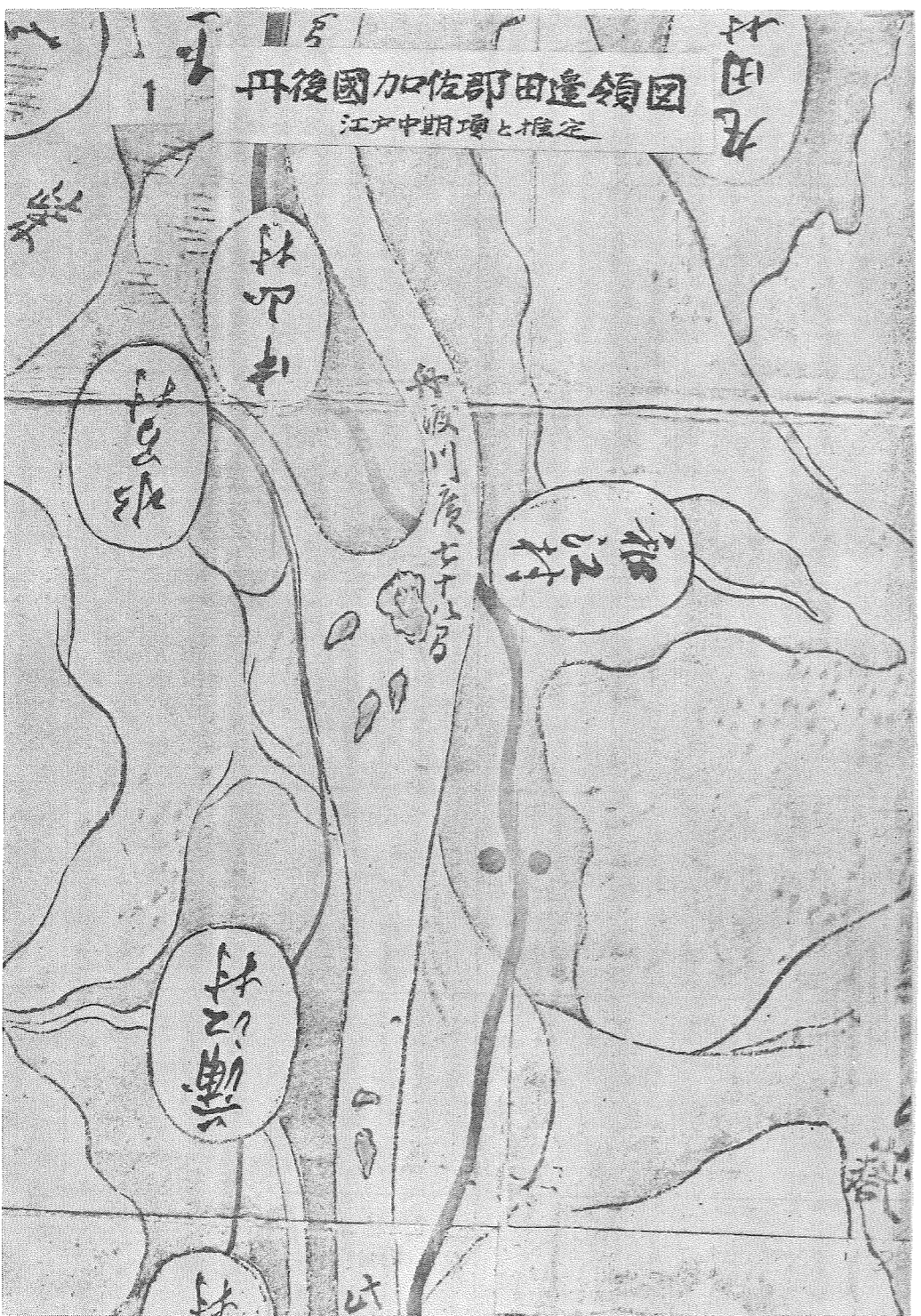
文献資料について

前にも和江地先は由良川に於ける先史文化遺物の採取された初例の地として述べたが、この採取地点について、当時の砂利採取の従業者堀池広安、井本行春の両氏は一致した意見として、

由良川河口から上流約二・五軒の南北に長く横たわる城島の右側、即ち舞鶴市上蒲江一帯及び三軒の地点にある西島（昭和三十九年廃土によつて消失）の右南岸一帯と、八雲橋下流約〇・二軒の地点を先ず挙げる。

そしてこれを発表された小江氏（昭和三十七年）（一九六二）は、破片の個個について観察するに水垢の固着しているものと、その固着していないものの別があること、また土器片の内外両面及び断面は著しく摩滅していないなどから……その遺物類は河底乃至河底下の土砂中に、平面的に埋蔵されていないこと、それら遺物が他から移動したものであるとしても、あまり遠く離れた上流ないし両岸から運搬されたものでないことなどが推定されるとしている。

さて、地形資料を述べると、享保十六年（



一七三一)「加佐郡寺社町在旧記」中には、瀬戸嶋 元来寺嶋と云 同前に千草嶋 浦江の城島又糠塚と云小山有。

享和元年(一八〇一)「丹後加佐郡旧語集」は、

寺嶋古城 細川家有吉四郎左衛門在城之跡也 和江村ノ前川中ニ有リ渡場ノ下北ノ方也 先御代堀崩サレシニ岩山ニテ難堀小笹生タリ 下ノ方平地ニテ小竹藪幅二十間半 長サ四五十間モ有ヘシ 水東西ニ流レ満水ノ時此嶋ニ水滯引事遅シ 先御代嶋ノ中通ヲ幅五・六尺堀抜被仰付 洪水ノタビニ土カケ流シ不残トシテ川幅広クナリ 満水ニ引ヤスク滯ヘ少シ雉子カ床ト云

ここで旧語集中の寺嶋は果して細川氏の家臣有吉四郎左衛門の古城趾だったか、それとも下流の城島がそれなのか甚だ疑問視しなければならぬが、寺嶋の呼称については当時現仏心寺の裏の寺山の余脈が大きく伸びて由良川の流れを遮っていたと思われ、細川忠興は洪水の際の上流部の被害を軽減するため、突出した部分中の鞍部を切開いて二流としたのであった。このことによつて満水の際には水が引き易くなったが、洪水のたびに土を駆け流して遂には孤立して島となった様子が現

われる。またこの島の付近には紅葉御殿と称された雉子山建福寺の名が地元資料にあるが、長禄三年(一四五九)注進丹後国諸庄郷保惣田数帳目録の中には

(由良カ) 四十九町九段二百九十二歩内
虫食

(一町一段カ) 「四十五歩和江村岸九郎左衛門
虫食

二十五町三段百二十一歩 建福寺
十八町八段五十九歩 本光院

二町七段六十七歩 不足可有紀明之
和江の大半はこの建福寺の寺領であつたと推測される。

その外絵図によつて藩主牧野氏の「丹後国加佐郡田辺領図」(年代未詳)によると、由良川の川幅は現大川橋より下流は河口迄六十二間であるに反し、和江地先の川幅は七十八間として瀬戸島と見られる島を最大に他に三つの島が書かれている。また下流の城島は二つの小島となつているのも面白い資料である。その後の島の変遷について最近福知山土木工管所で発見された明治三十年頃の「由良川実測図」によると、寺嶋(瀬戸島)は東島(後の西島)と再び接合していたことがうかがわ

れる。また地図3の昭和三十年頃に示された島島を見ても瀬戸島開さんがどのようにして行われたか、その工事の跡が判明して貴重な資料に思われる。

さて、由良川は古代より住民にとつて洪水の歴史とも云うべき避け難い宿命にあつたが、近現代に至つて明治四十年の大洪水、近くは昭和二十八年の大洪水を契機として、この和江地先に浮ぶ島島の除去工事が進められ、今日では大きな変貌を遂げている。今工事の主なものを年代別に列挙すると、

一九一四(大・三) 瀬戸島水面上部の除

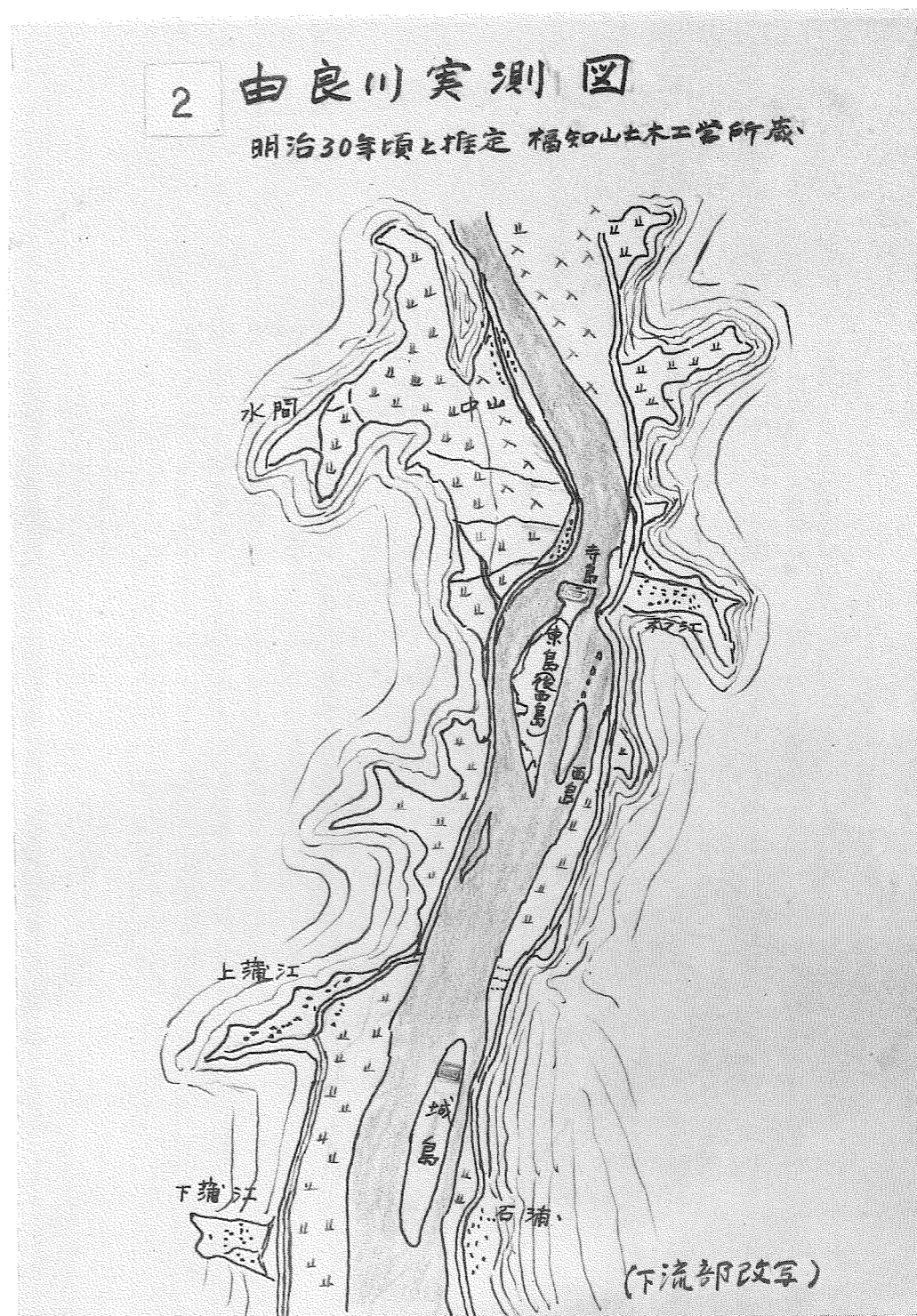
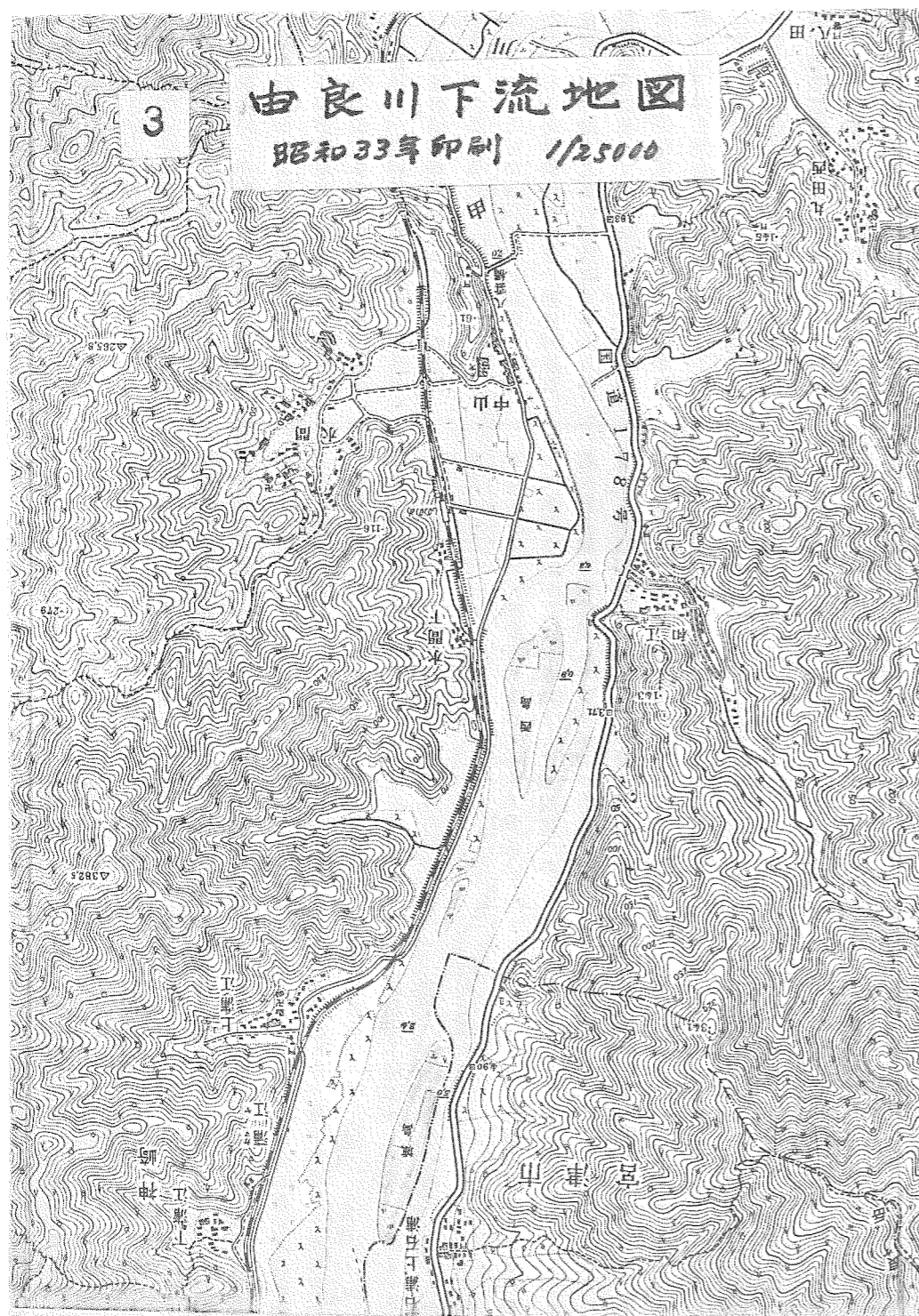
去、この廃土にて下流の高田新田造成、旧西島は新田と併合

一九六六(昭・四一) 瀬戸島水面下の除

去と西島廃土、この土で西島新田及和江谷埋

一九七一(昭・四六) 城島廃土開始

現在最後の島城島は今、民間業者の手により城跡らしい山塊を晒しつつ削平されているが、昭和四十七年筆者の実態調査によると、この山塊こそは瀬戸島同様宮津市石浦地区の山の余脈が川中に伸びて孤立化した島と想わ



H 津雲A式 (拓31・38・39・40)

G 丹後平CⅢ式 (拓34・35・36・37)

F 島式 (拓28・29・30・32・33)

E 柳谷式(浜詰KⅡ併行) (拓20・21・22・23・24・25・26)

瀬戸内から近畿北部にかけて分布する土器で、曲線的な沈線が発達し、地文の縄文が見られる。壁面厚く黄褐色で大きく開いた口縁部は把手や突起などで飾られる。

京都府下竹野郡柳谷遺跡を指標とする土器で、周辺浜詰KⅡと併行のものである。口縁に縄文を施し、口縁部以下は施文方向の一定しない縄文または擬似縄文の地文に、渦状または曲線状沈線を施している。また局部的に磨消がなされた磨消縄文である。

京都府下竹野郡平遺跡を標式とするもので、磨消縄文をとまわず沈線文と刺突文のみで文様を構成する。砂粒を多く含み、やや薄手の土器で色も褐色、淡褐色、青灰色など焼成のよくない土器が多い。

岡山県津雲貝塚の土器を指標とするもので、口縁部付近に曲線的な沈線文様を作り、沈線の中に縄文を残し他は磨消縄文としている。この式の特徴は細い繊維の縄文で器面を覆い、色調は黒褐色である。

その他形式不確定のもの

拓41・42縄文後期と推定されるが、磨滅もひどく形式不明である。

拓43縄文中期と推定、粒子細く暗橙黄色で文様の構成、胎土焼成より明らかに関東系のものと思われる。

五、様式より見た由良川の土器の編年表

第1表 様式より見た由良川の土器分布の状況

様式	瀬戸内	近畿中央	近畿北部(由良川)	山陰	関東	東
縄前 I 層 II 層 III 層 Z 層 山崎彦大	- - - - -	++ ++ ++ ++ ++	++ ++ ++ ++ ++	- - - - -	- - - - -	- - - - -
鷹船関東系	++ +	- +	++ +	- -	- -	- +
丹後平CⅢ式 島(柳谷・浜詰) 津雲池利山 福田KⅡ 津四加元	- - - - -	- - - - -	++ ++ ++ ++ ++	- - - - -	- - - - -	- - - - -
船橋	-	+	+	-	-	-

今回のものは、第一・二報を含めて編年したもので、次の如くである。

これらを総合的に見た場合、近畿中央部、瀬戸内の土器がその主流を占め、ことに瀬戸内の文化については、奥丹後の海岸線沿いの遺跡と軌を一にしていることがからも、日本海岸を経ての文化の影響が考えられる。それ故これらの影響下に発達した柳谷式や丹

れ、下流部はまた異質の堆積土の島の様に感じられた。ことに右岸の本市蒲江側は人工によって花崗石の石垣が施されて水面より高くなっているが、中央部は低湿地で、一部に昔水田に利用した跡が残っており、いまなお葦の繁る湖沼帯も見られた。それ故耕地としての利用は上流部の山塊付近と下流部一帯であって、或る一時期に土砂の堆積が進み、二島が一島として結合を始め、後に人工も加えられて成立した島であるように想われる。田辺藩では数年毎に「水戸浚へ」を実施したと云うが、或は土砂の廃棄場所として格好の位置であったのではあるまいか。

以上述べたことは由良川河口の地形の変遷であるが、更に一步進めて土器の散布地点は嘗ては古代の地形ではどの様な姿であったろうか、形骸を無くしてしまった今日、今更の如く文献的論述が隔靴搔痒の感をおぼえ悲哀すら感じる。然し乍ら小江氏(一九六二)の指摘にもある如く、散布地点が殆ど移動していないとするならば、この位置こそは縄文時代の最も重要な生産活動の舞台であり、生活資源とも密接な関係のところであったことは間違いない事と思われる。住居の位置について、従来かようなところでは、突出した部分

で、この台地のふちに沿い、馬蹄形状の集落が営まれることが多く、西島の右南岸地帯、城島の右岸なども、結局こうした遺跡地ではなかったろうか。淡水水魚族の遡降の捕獲、両水界の貝類や生物の採取などにも、ここが咽喉的役割を果し、格好の場所であったことが考えられる。

三、城嶋の削平と先史遺物の河底採取

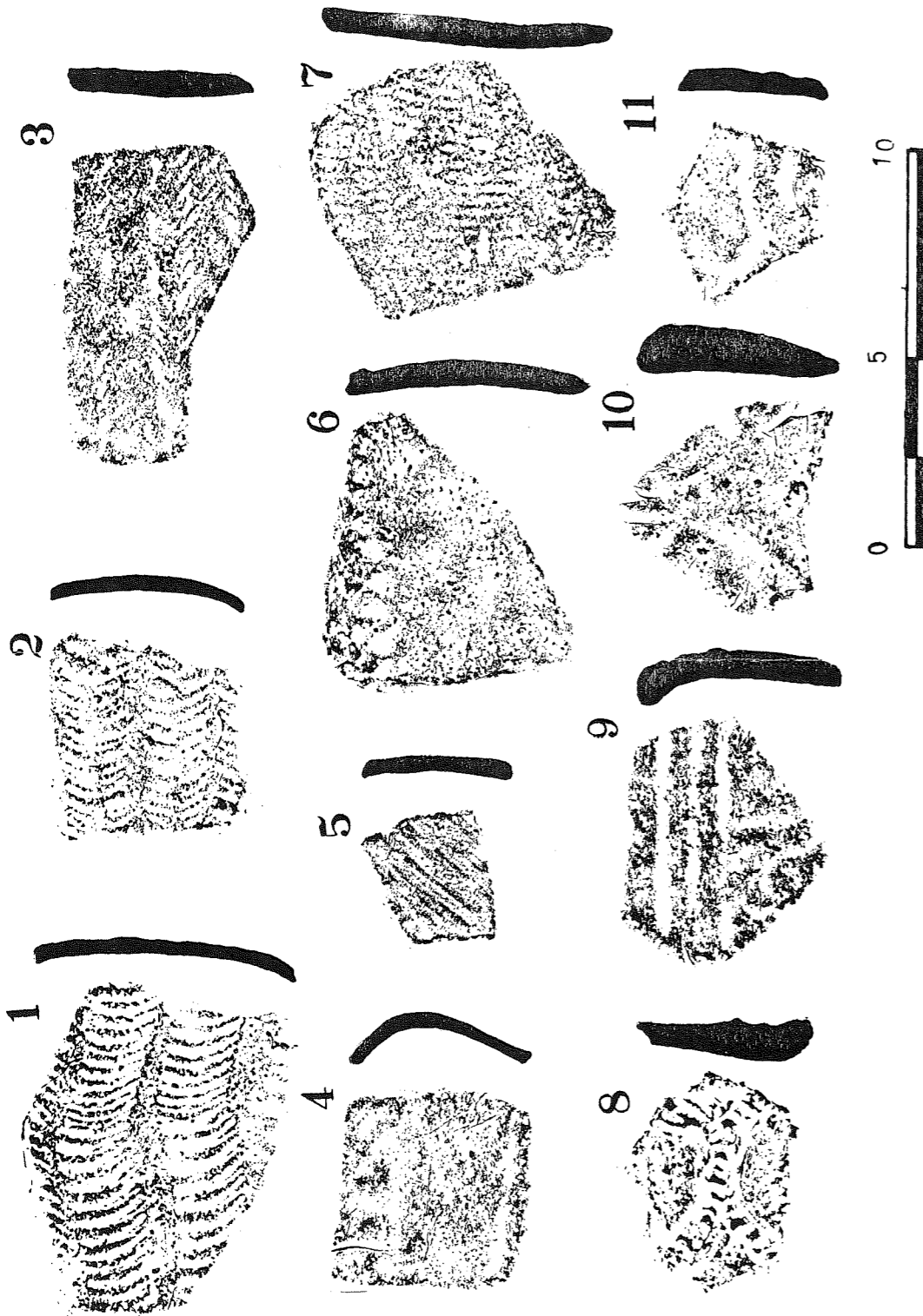
和江地区では昭和四十年及び同四十一年に西島の廃土を入江に埋立て西島新田を造成したが、昭和四十五年度には残った城嶋の削平事業が民間業者「由良川開発KK」によって計画され、この西島新田の地点は砂利集積場として利用され、ここを基地として城島までの約一杆の間を浚渫船(サンドポンプ方式)によって水路の浚渫が行われた。筆者が気づいた時は既に水路の半ばが浚渫され、僚船によって砂利が運ばれていたが、この砂礫を丹念に調べて見ると、明らかに古代遺物片の混入が認められたので、以来昭和四十五年三月より、昭和四十六年二月迄の砂利集積場にて採取を行ったものである。

なお採取には初期は筆者が単独で行っていたが、後には当時の城南中学校時事クラブ員

六名が協力者として加わり、中井利和、村尾政人の両君は献身的に協力された。

四、縄文遺物の分類

- (縄文前期)
- A 北白川下層Ⅱa式 (拓1・2・3)
- 上部は連続爪形痕紋で下部は羽状又は斜縄文の平底の口縁部の開いた深鉢形の破片と思われる。薄手で厚さ三耗程度、黒褐色である。
- B 北白川下層Ⅱa-Ⅲ式 (拓4・5)
- 破片に特徴が少なく様式が見分け難いが、拓4は薄手で黒褐色、キャリパー形が明らかであり、拓5は薄手の上に地文に斜縄文が見られる。
- (縄文中期)
- C 船元式 (拓6・7・8)
- 岡山県倉敷市船元貝塚を標式とする土器で、由良川河底では早くから採取されている。土器面にはかたい繊維の縄文が地文として良く発達し、凹型の平底か角底が多く、厚さは七耗程度である。
- (縄文後期)
- D 中津式 (拓9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19)



後平CⅢ式などの文化は、由良川下流の各所の遺跡に痕跡が及んでいるのが見られる。この中例外と見られる地頭及び和江において僅か乍ら出土した関東系土器や山陰島様式のものについては、こうした流れとは別に時折の接触があったか、或る時期的な接触があったのではなからうかと思われる。

六、あとがき

由良川より採取した古代文化遺物についての拙稿も、一応和江地先の地形の復原と採取遺物を以て縄文編を終ることとした。未だ由良川の先史については、河底散布の土器の採取遺物からの推論となっている部分が多く、今後更に桑飼下遺跡のような個所が発見されて、綿密な調査の上に解明されて行く日の近からん事を祈るものである。終りにのぞみ、幾多の御教示をいただいた平安博物館の渡辺誠先生、調査に便宜を与えられた由良川開発KKの方がた、御助力をいただいた村尾・中井の両君に深甚なる謝意を表する。

土器の説明

1	縄文前期	北白川下層Ⅱa	22	縄文後期	柳谷(浜詰KⅡ併行)
2	縄文前期	北白川下層Ⅱa	23	縄文後期	柳谷(" " ")
3	縄文前期	北白川下層Ⅱa	24	縄文後期	柳谷(" " ")
4	縄文前期	北白川下層Ⅱa~Ⅲa	25	縄文後期	柳谷(" " ")
5	縄文前期	北白川下層Ⅱa~Ⅲa	27	縄文後期	柳谷(" " ")
6	縄文中期	船元	28	縄文後期	島
7	縄文中期	船元	29	縄文後期	島
8	縄文中期	船元	30	縄文後期	島
9	縄文後期	中津	32	縄文後期	島
10	縄文後期	中津	33	縄文後期	島
11	縄文後期	中津	34	縄文後期	丹後平CⅢ
12	縄文後期	中津	35	縄文後期	丹後平CⅢ
13	縄文後期	中津	36	縄文後期	丹後平CⅢ
14	縄文後期	中津	37	縄文後期	丹後平CⅢ
15	縄文後期	中津	31	縄文後期	津雲A
16	縄文後期	中津	38	縄文後期	津雲A
17	縄文後期	中津	39	縄文後期	津雲A
18	縄文後期	中津	40	縄文後期	津雲A
19	縄文後期	中津	41	縄文後期	形式不明
20	縄文後期	柳谷(浜詰KⅡ併行)	42	縄文後期	形式不明
21	縄文後期	柳谷(" " ")	43	縄文中期	関東形?

23



22



21



20



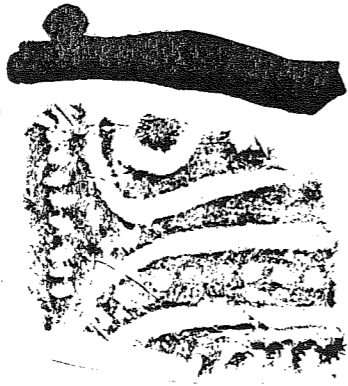
27



25



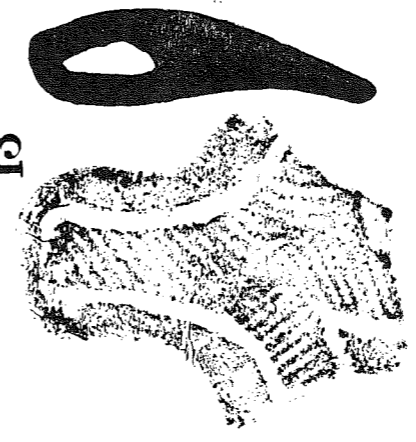
24



14



13



12



16



15



19



18



17



